

郷土の文化財21

榎垣外遺跡

—平成10・11年度 県単道路改良事業に

伴う榎垣外遺跡発掘調査報告書—

2000年（平成12年）3月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会

平成 12 年 6 月 1 日

各 位

岡谷市教育委員会
教育長 北澤 和男
(公印省略)

榎垣外遺跡—平成 10・11 年度県単道路改良事業に伴う
榎垣外遺跡発掘調査報告書— 贈呈について

時下、ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
当市の文化財保護行政については、常に一方ならぬご高配とお力添えを賜り深く感謝
いたします。

このたび、郷土の文化財 21 榎垣外遺跡—平成 10・11 年度 県単道路改良事業に伴
う榎垣外遺跡発掘調査報告書—を刊行いたしましたので贈呈申し上げます。ご高覧いた
だき、教育・学術研究・文化財保護資料等としてご活用いただければ幸いに存じます。
なお、お手数ですが、受領書を下記宛にご返送くださいますようお願いいたします。

記

返送先 〒394-0021 長野県岡谷市郷田 2-1-52 岡谷市教育委員会生涯学習課分室

平成 年 月 日

受領書

岡谷市教育委員会殿

郷土の文化財 21 榎垣外遺跡
—平成 10・11 年度 県単道路改良事業に伴う榎垣外遺跡発掘調査報告書—
を 部受領しました。

氏 名

住 所 (機関・代表者名)

印

郷土の文化財21

榎垣外遺跡

—平成10・11年度 県単道路改良事業に

伴う榎垣外遺跡発掘調査報告書—

2000年（平成12年）3月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会



長野県内における遺跡の位置図

序

このたび「県単道路改良事業に伴う榎垣外遺跡発掘調査報告書」を刊行することになりました。

岡谷市で最も大きな遺跡であります榎垣外遺跡は縄文時代から現在に至るまで多くの人々が住み、生活に適した地であります。とくに奈良・平安時代の集落はこれまでに数多く発見されており、住居址の中からは、八花鏡や方鏡、バックル、紡錘車などが発見されております。また、竪穴式住居址ばかりではなく、長大な掘立柱建物跡も発見され、諏訪地方全体を治めていた官衙址であると推定されています。このような発見により官衙址を中心としてその周辺に集落が栄えていたことがようやく判り始めてまいりました。今回榎垣外遺跡の発掘調査により官衙で執務に当る役人の使う硯や帯紐の金具が発見され、官衙を中心として栄えた榎垣外遺跡の性格を知る重要な資料を得ることができました。

本書はこうした調査成果を掲載し、報告するものです。今後この報告書が岡谷市の原始・古代の生活の様子を解き明かし、学術向上に利用されることを願っております。

最後になりましたが、埋蔵文化財の保護に対しまして、深いご理解とご協力をいただきました長野県諏訪建設事務所、工事関係者、地元中村区の皆様に厚く御礼申し上げます。本書の上梓をもってご挨拶にかえさせていただきます。

平成12年3月

岡谷市教育委員会

教育長 北澤 和男

例 言

1. 本書は県単道路改良事業に伴い、平成10年度から平成11年度に実施した榎垣外遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は岡谷市が諏訪建設事務所より委託を受け、岡谷市教育委員会が実施した。
発掘調査及び報告書刊行事業年度
平成10年度 榎垣外遺跡発掘調査
平成11年度 榎垣外遺跡発掘調査
平成11年度 発掘調査報告書刊行
3. 報告書の作成作業の分担及び執筆分担は第1章3に記した。
4. 調査の方法、資料整理、報告書の基準、凡例の詳細は第1章3に記した。
5. 報告書作成にあたり、下記の方にご教示頂いた。記して感謝申し上げます。(敬称略)
長野県教育委員会文化財・生涯学習課 原 明 芳
6. 本調査の出土品、諸記録は岡谷市教育委員会が保管している。

本文目次

序 例 言

第I章 調査の経過と概要	1
1. 発掘調査にいたる経過	1
2. 発掘調査組織	3
3. 調査の概要	5
第II章 遺跡の位置と周辺遺跡	9
第III章 遺構と遺物	11
(1) 1号住居址	11
(2) 2号住居址	12
(3) 3号住居址	13
(4) 4号住居址	14
(5) 5号住居址	14
(6) 6号住居址	16
(7) 8号住居址	20
(8) 9号住居址	20
(9) 7号住居址	20
(10) 14号住居址	22
(11) 10号住居址	23
(12) 11号住居址	25
(13) 12号住居址	31
(14) 13号住居址	33
(15) 15号住居址	33
(16) 小竪穴	34
(17) 溝状遺構	36
おわりに	37

付 表 住居址一覧表

写 真 図 版

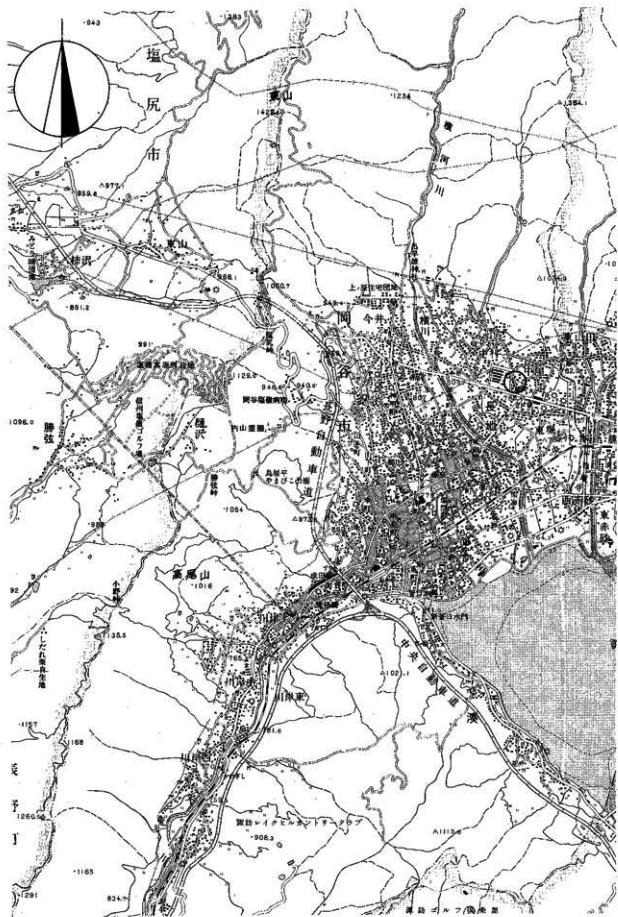
挿 図 目 次

第1図	榎垣外遺跡(○印)の位置(1:50,000)	2
第2図	榎垣外遺跡発掘調査区図(1:2,500)	4
第3図	榎垣外遺跡遺構全体図(1:300)	7・8
第4図	榎垣外遺跡と周辺の遺跡(1:10,000)	10
第5図	1号住居址平面図(1:50)	11
第6図	1号住居址出土遺物実測図(1:3)	11
第7図	2号住居址平面図(1:50)	12
第8図	2号住居址出土遺物実測図(1:3)	13
第9図	2号住居址出土遺物実測図(1:1.5)	13
第10図	3号住居址平面図(1:50)	14
第11図	4号住居址平面図(1:50)	14
第12図	5号住居址平面図(1:50)	15
第13図	5号住居址出土遺物実測図(1:3)	16
第14図	6・8・9号住居址平面図(1:50)	17
第15図	6号住居址出土遺物実測図(1:3)	18
第16図	7・14号住居址平面図(1:50)	21
第17図	7号住居址出土遺物実測図(1:3)	22
第18図	14号住居址出土遺物実測図(1:3)	23
第19図	10号住居址平面図(1:50)	24
第20図	10号住居址出土遺物実測図(1:3)	24
第21図	11号住居址平面図(1:50)	26
第22図	11号住居址カマド平面図(1:40)	27
第23図	11号住居址出土遺物実測図(1:3)	28
第24図	11号住居址出土遺物実測図(1:3)	29
第25図	11号住居址出土遺物実測図(1:1.5)	31
第26図	12号住居址平面図(1:50)	32
第27図	12号住居址出土遺物実測図(1:3)	33
第28図	13号住居址平面図(1:50)	33
第29図	15号住居址平面図(1:50)	34
第30図	小竪穴平面図(1:40)	35
第31図	小竪穴出土遺物実測図(1:3)	35
第32図	溝状遺構平面図(1:40)	36

第 I 章 調査の経過と概要

1. 発掘調査にいたる経過

平成9年6月12日	平成10年度実施予定国道・県道・河川改修に係る埋蔵文化財に関する照会が長野県諏訪建設事務所よりあり、覆垣外遺跡について長野県教育委員会へ回答する
平成10年1月27日	上記に関する埋蔵文化財の保護協議を岡谷市役所において県教育委員会文化財保護課、諏訪建設事務所、岡谷市教育委員会生涯学習課、及び岡谷市建設部都市計画課の4者により開催
4月21日	諏訪建設事務所より埋蔵文化財包蔵地発掘調査について（依頼）がある
4月21日	諏訪建設事務所、岡谷市建設部バイパス対策課、岡谷市教育委員会の3者で打ち合わせを行う
5月22日	埋蔵文化財の発掘の通知を提出
5月22日	平成10年度埋蔵文化財発掘の通知についてを県教育委員会へ提出
6月22日	諏訪建設事務所へ発掘調査の予算書と発掘調査実施計画書を発送
6月23日	長野県教育委員会教育長より周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）
6月26日	岡谷市役所において諏訪建設事務所、岡谷市建設部都市計画課、バイパス対策課、岡谷市教育委員会生涯学習課4者で打ち合わせを行う
6月30日	平成10年度県単道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書の締結
7月3日	県道下諏訪辰野線（中村新道）における埋蔵文化財の発掘調査の実施について、近隣住民へ通知文書配布
7月13日	現場作業に着手
8月30日	株式会社岡谷組工事事務所において関係施工業者と調査工程の打ち合わせを行う
10月14日	埋蔵文化財発掘調査の報告について県教育委員会へ提出
平成11年1月12日	現場作業終了 出土品整理に入る
2月17日	岡谷市役所において諏訪建設事務所、岡谷市建設部都市計画課、岡谷市教育委員会生涯学習課の3者で平成11年度調査日程について打ち合わせを行う
3月10日	平成10年度県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務完了届提出
3月15日	完了検査結果通知書
3月26日	平成11年度埋蔵文化財発掘の通知について県教育委員会へ提出



第1図 榎垣外遺跡(○印)の位置 (1:50,000)

4月5日	発掘調査終了届 埋蔵文化財の拾得について(届) 埋蔵文化財保管証提出
4月14日	諏訪建設事務所へ発掘調査の予算書と発掘調査実施計画書を発送
4月16日	長野県教育委員会教育長より周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)
4月20日	平成11年度県単道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書の締結
5月14日	平成11年度発掘調査範囲について(申請)を提出
5月17日	岡谷市役所において諏訪建設事務所、岡谷市建設部都市計画課、バイパス対策課、都市開発課、岡谷市教育委員会生涯学習課の5者で本年度調査日程の打ち合わせを行う
5月19日	岡谷市長地支所において(土)下諏訪辰野線岡谷市長地工区道路改良工事説明会を行う
5月28日	現場作業に着手
6月3日	長野県教育委員会教育長より発掘調査範囲の決定について(通知)
10月6日	現場作業終了 出土品整理に入る
平成12年3月13日	報告書刊行

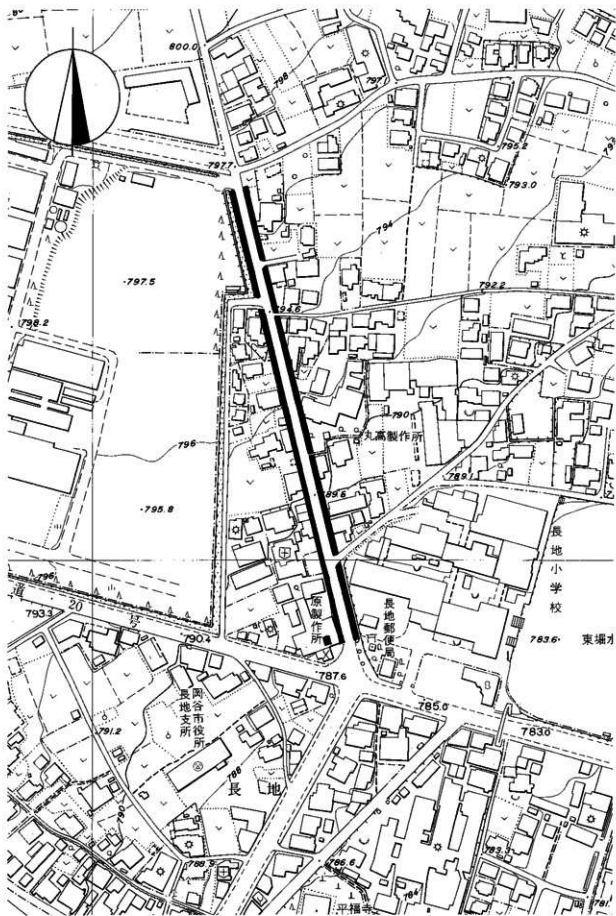
2. 発掘調査組織

平成10年度

事務局	北澤 和男(教育長)	井出 皓基(教育次長)	林 勝弘(生涯学習課長)
	会田 進(生涯学習課主幹)	小坂 英文(同指導主事)	廣瀬 智子(同主事)
調査担当者	林 賢(日本考古学協会会員)		
調査員	佐藤美枝子		
調査補助員	笠原 香里	腰原 綾	依田由紀子
作業従事者	藤森 知広	浅田 博康	安倍 史裕
	今井 悦子	興石 雅子	
	小島 利彦	鈴木 幸枝	西堀 喜信
	浜 益弘	林 順子	
	藤森 芳	丸山ゆき子	宮坂あさ子
	宮沢 辰春	宮沢 光男	
	桃沢 良三	山田 和子	山田 幸弘

平成11年度

事務局	北澤 和男(教育長)	堀向 弘右(教育次長)	林 勝弘(生涯学習課長)
	会田 進(生涯学習課主幹)	小坂 英文(同指導主事)	鮎沢 諭志(同事務員)
調査担当者	林 賢(日本考古学協会会員)		
調査員	腰原 綾		
作業従事者	藤森 知広	安倍 史裕	高橋 公夫
	中島 九重	西堀 喜信	
	浜 益弘	増沢みぎわ	宮坂あさ子
	宮沢 辰春	桃沢 良三	



第2図 榎垣外遺跡 発掘調査区図 (1:2,500)

出土品整理・報告書作成

調査組織

平成11年度

事務局	北澤 和男 (教育長)	堀向 弘右 (教育次長)	林 勝弘 (生涯学習課長)		
	会田 進 (生涯学習課主幹)	小坂 英文 (同指導主事)	鮎沢 諭志 (同事務員)		
調査員	腰原 綾				
作業従事者	藤森 知広	安倍 史裕	今井 悦子	上原 篤志	笠原 鈴子
	小林くにあ	小林 謙一	興石 雅子	鈴木 幸枝	高橋 公夫
	土田 万蔵	中島 九重	西堀 喜信	浜 益弘	藤森 芳
	増沢みぎわ	丸山ゆき子	宮坂あさ子	宮沢 辰春	宮沢 光男
	桃沢 良三	山田 和子	(敬称略)		

3. 調査の概要

1. 事業主体者 諏訪建設事務所
2. 発掘調査主体者 岡谷市教育委員会
3. 遺跡名 榎垣外遺跡 (岡谷市遺跡地図№134)
4. 遺跡の所在地 岡谷市長地 (中村区)
5. 調査の目的 県単道路改良事業に伴う当該遺跡の記録保存
6. 発掘調査期間 平成10年7月13日～平成11年1月12日
平成11年5月28日～平成11年10月5日
7. 遺物整理期間 平成11年10月6日～平成12年3月13日
8. 調査面積 平成10年度 601.8㎡
平成11年度 641.4㎡
9. 調査方法 グリッド表記について
中央のセンター杭を基準に2mグリッドを設定し、東西方向をアルファベット、南北方向を数字にて設定
10. 発見された遺構 奈良・平安時代住居址 15棟
小 竪 穴 3基
11. 発見された遺物 縄文時代 土器
石器
奈良・平安時代 土師器・須恵器・灰釉陶器
石器・金属器 (第1表)

第1表 石器・金属器一覧表

種 別	器 種	点 数
石 器	砥 石	1
青 銅 器	蛇 尾	2
鉄 器	刀 子	1
	紡 錘 車	2
	麻 皮 制 器	1
	鉄 製 品	3
	鉄 洋	1

12. 資料整理の方法と基準

遺跡No. 134 (岡谷市遺跡地図No) 覆垣外遺跡

遺物No. 遺跡No・グリッド・遺物取り上げNo・出土遺構Noと層位

グリッド グリッド区名を示すアルファベットと数字

遺 構 略 号 住居址-H

小竪穴-数字P

層位 (土層名) 略号

遺 構 内		遺 構 外	
覆 土 上 層	F 上	黒 色 土	ク ロ
覆 土 下 層	F 下	暗 褐 色 土	ア ン カ ツ
覆 土	F	表 土・耕 作 土	表
床 上 又 は 床 直	床	攪 乱	カ ク
柱 穴 内	P 数字	表 採	Z

土器実測図 実測図化は、スリット写真撮影を株式会社シン技術コンサルに依頼した。写真トレースによる実測図化はすべて教育委員会でやっている。

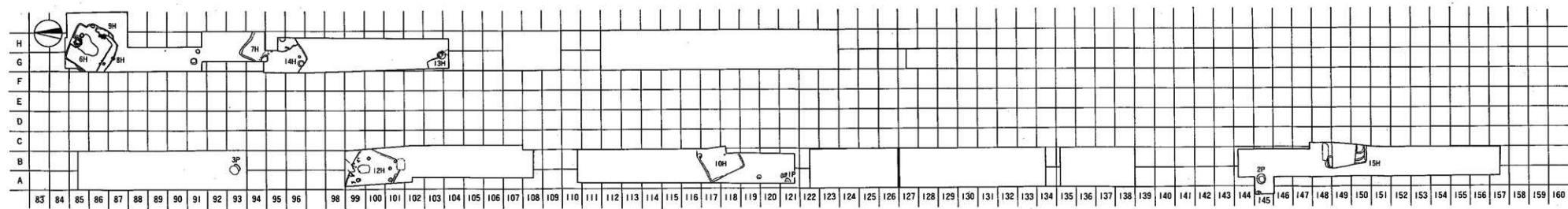
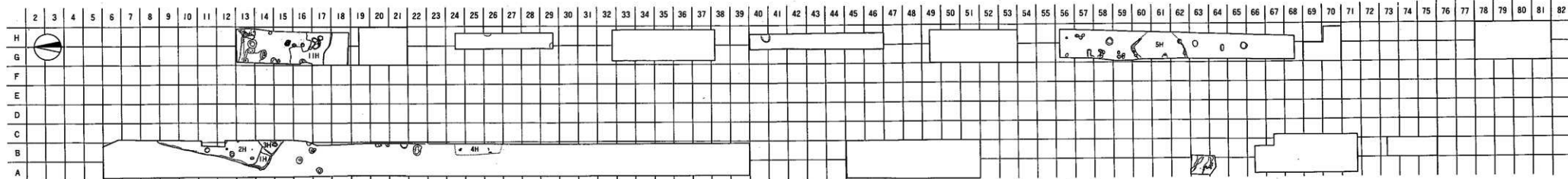
実測図の断面は、土師器-白抜き、須恵器-黒塗りによって区別した。

黒色土器は内面スクリーントーンで表現した。

遺構図 各遺構図中の略号は以下のようにした。柱穴中の数値 (マイナス表示) は付近の床面から測った深さを示している。

F	焼 土	P 数 字	住居址柱穴
S	石		焼 土
P	土 器		貼 床
数 字 P	小 竪 穴		

報告書作成作業分担 遺物の整理・実測、遺構図版作成は腰原綾が行い、遺物のトレースは土器のトレースを増沢みぎわが、石器・金属器のトレースを腰原が行った。土師器・須恵器は長野県教育委員会の原明芳氏にご教示頂いた。本文執筆は第1章1とおわりにを小坂英文が、その他を腰原が行い、会田進が監修した。



0 8m

第3圖 覆垣外遺跡遺構全体圖 (1:300)

第II章 遺跡の位置と周辺遺跡

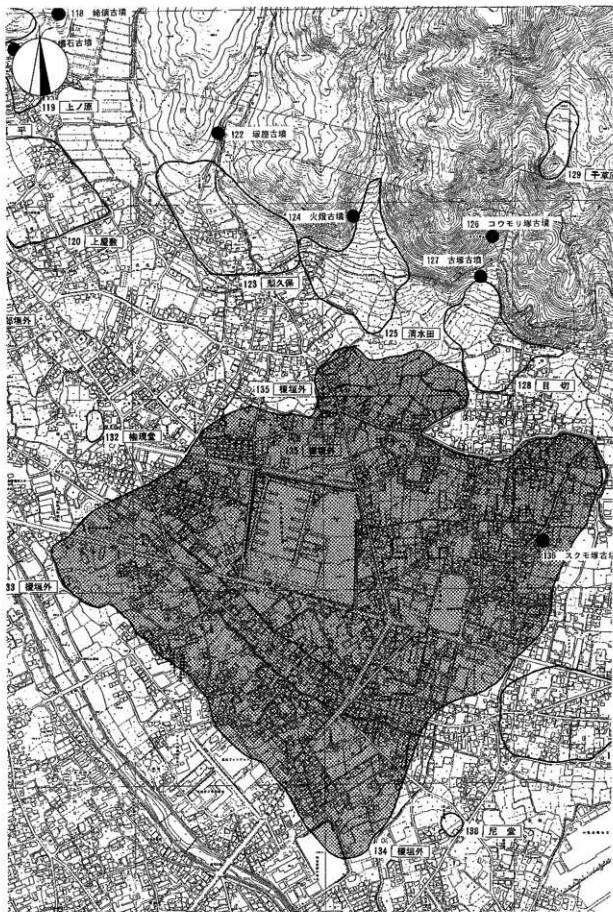
横河川扇状地は諏訪湖盆地の北側にあり、岡谷市長地の平坦部の大部分を覆う広大な扇状地である。西は塚間川に、東は下諏訪町との境界をなす十四瀬川によって限られる。北側の長地山地周辺丘陵部とは、十四瀬川上流域の低地によって区分される。また南はJR中央本線よりもやや諏訪湖側あたりから湖岸沖積低地へと移行していく。扇状地の谷口である出早雄小萩神社付近で標高860mほど、南側に下った中央本線付近で約760mとゆるやかに傾斜する。現在横河川は明治時代以降の人工的な築堤により扇状部を貫流し典型的な天井川になっているが、以前は時により流路を変え多くの細流となって流れていた。しかし通常河水は伏流水として地下にしみ込み浸水したり洪水に襲われることはなく、不時の出水・洪水さえ注意すれば、細流にかこまれた自然堤防のような場所は、原始・古代の人々にとって住みやすい土地であった。

榎垣外遺跡は長地の中屋・中村・東堀地区の横河川扇状地に広がり、縄文時代や弥生時代の遺構・遺物が見られる。大正時代に編纂された「諏訪史一」には中屋・東堀地区では大量の土師器や須恵器が出土しており、相当大きな集落が存在していたのではないかとする記載が見られ、この頃から奈良・平安時代の大規模な集落の存在が知られていた。

榎垣外遺跡において最も注目されることは昭和57年の長地保育園建設に伴い行われた発掘調査において発見された2×10間以上の長大な掘立柱建物跡の存在である。以来、榎垣外遺跡では多くの調査が行われ、今までに多くの掘立柱建物跡と奈良・平安時代住居址が発見されている。遺跡の範囲については当初この掘立柱建物跡を北東端として2km四方に広がると考えられていたが、その後の調査で横河川の自然堤防付近まで掘立柱建物跡などの遺構を発見しており、集落の広がりが増えつつあることが明らかになってきた。また、刀子や墨書土器・円面硯、丸靱や蛇尾・鉄製バックルなどの帯金具、緑釉陶器皿・唾壺などが出土し役人の存在を思わせる出土遺物があり、また長大な掘立柱建物跡も発見されることから官衙址の可能性が高まり注目されている。

榎垣外遺跡の北方、長地山地周辺丘陵部には遺跡が多数あり、長大な掘立柱建物跡を発見した長地保育園から北西に直線1kmほどの所に梨久保遺跡がある。ここから尾根を越えた東側には滑水田遺跡、日切遺跡があり、いずれも扇状地の南に面した日当たりの良い場所に奈良・平安時代の住居址がまぎれずに発見されている。これらの遺跡からは縄文時代から平安時代に至るまでの遺構や遺物が豊富に出土する。また日切遺跡では掘立柱建物跡を発見した長地保育園から直線わずかに北に300mほどの所に2×3間などの掘立柱建物跡8棟が発見されている。榎垣外遺跡との距離が近いことから、これら住居址や掘立柱建物跡は榎垣外遺跡の集落と深く関連したものと言える。

このように榎垣外遺跡は古くから大規模な集落として知られていたが、これまでの発掘調査調査により、当時の官衙址を中心として栄えた奈良・平安時代の大規模な集落であることが判り、注目される遺跡である。



第4図 榎垣外遺跡と周辺の遺跡 (1:10,000)

第Ⅲ章 遺構と遺物

(1) 1号住居址

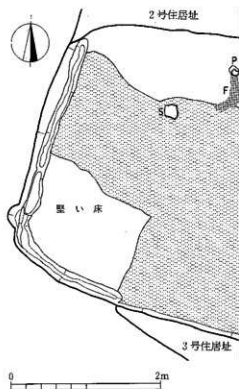
調査の経過 ローム層まで攪乱が及んでいるため、遺構検出では地山に掘り込まれている竪穴を発見した。

本址は、当初西壁が直線に10m以上の長さで発見されたため、かなりの大型住居址と推定しながら掘り進めた。覆土は薄く、床面検出を行うと床の高さに違いが認められ、一方は地山を掘り込んで床面としているのに対し、1住は黒褐色土中にタキ面の床を持つことがわかった。このため黒褐色土中に床面を持つものを1住とし、その下から発見された住居址を2住とした。さらに1・2住の床下から発見された住居址を3住とした。

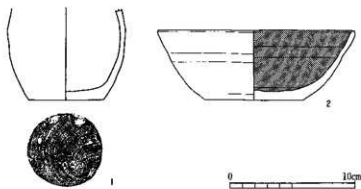
遺構 本址はA・B-13・14グリッドに位置し、3棟の住居址が重複しているうちの1棟である。東壁は調査区外に及ぶことから南北3.6mの隅丸方形の住居址であると考えられる。掘り込みは比較的深く西壁で約34cm、南壁で約20cmである。周溝は西壁の2住と重複する所から南壁の3住と重複する部分まで見られ、幅15~20cm、深さ3~5cmである。

床面は2・3住と重複している部分に黒褐色土を入れて貼床にしてあり、南西隅は黄色砂礫層を叩き締めて床にしている。北壁付近は明瞭な叩き面や貼床は見られない。床面検出時に柱穴の検出を行ったが発見できなかった。

カマドは調査区内に発見できなかった。西壁には周溝があり南壁も中央部まで検出されているが、構築材などカマドの存在を示すものは発見されていないことから、どちらにもカマドがあったとは考えにくい。北壁のほぼ中央部と思われる調査区壁際から焼土を検出しており、焼土の北側からは土師器小型甕の底部が出土しているのので、北壁にカマドが残っていると考えられる(第5図)。



第5図 1号住居址 平面図 (1:50)



第6図 1号住居址 出土遺物実測図 (1:3)

遺物 本址は覆土中に遺物が少なく、土師器片59点、須恵器片65点、灰釉陶器片1点が見られるだけである。このうち土師器小型甕と黒色土器坏の2点が図化できた(第6図)。

1は土師器小型甕の底部である。胴部は強い加熱を受けたのかぼろぼろに剝離しており、黒色変化した部分が見られる。わずかにもとの器面が見られる部分があり、ここからヨコナデによる整形であったと思われる。底部から4cmほど上がった所まではヘラケズリを施す。器壁は5mmと薄い。底部は糸切り痕を消すようにヘラミガキが施されるがあまり丁寧ではない。内面はナデによる整形であり、頸部の一部にタール状の付着物が見られる。

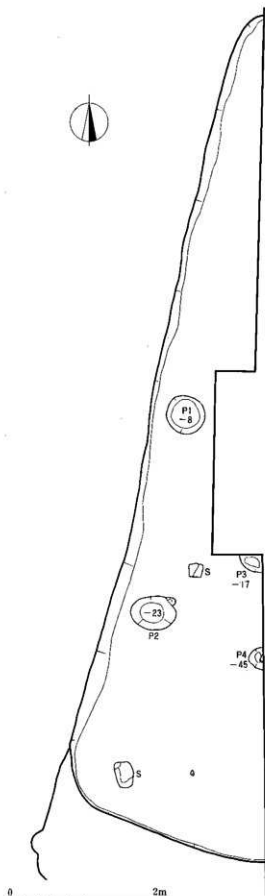
2の黒色土器坏は底部からゆるいふくらみを持ち口縁部へと立ち上がっていく。ロクロ調整によるヨコナデであるがやや焼成が甘いのかもろい感じがする。胴部下半分と口縁部は部分的に剝落し細かな凹みが見られる。内面の整形もナデである。色調は赤味を帯びた褐色であり口縁部に近い部分は色調が暗い。胎土に白色粒子と雲母片を含む。

黒色土器は器形から見て8世紀後半に位置づけられるであろうか。

(2) 2号住居址

遺構 本址は1住の北側に発見された住居址であり、B-9~12グリッドに位置している。重複関係が明らかとなる前から確認されていた西壁と、1住の貼床を削いで発見された南壁の方向から、南北が10.7mに及ぶ大きな住居址であることが推測された。しかし東西については調査区から2.5mほどが見えているだけで、ほとんどが調査区外へと延びているため不明である。西壁の掘り込みは約25cmであり、南壁は1住の床面から10cmの掘り込みを持つ。周溝は見られない。

床は黄色砂礫層を掘り込んでいるため礫が露出しており、踏み固めた程度の堅さで明確な叩き面や貼床は見られない。床面検出時にB-11グリッドからP1が



第7図 2号住居址 平面図(1:50)

確認された。また1住の貼床を剥いだ時点でB-12・13グリッドにP2～P4が検出された。この内P3・P4は大きさなどから主柱穴ではないが、P1・P2はどちらも径が50cmほどであることから、この住居址の柱穴であると思われる(第7図)。

遺物 本址は土師器片92点、須恵器片85点が出土しており、灰釉陶器片も6点出土している。このうち須恵器蓋2点と高環脚部1点、甕口縁部1点を図示できた(第8図)。

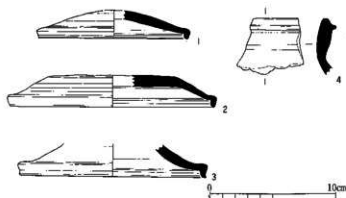
須恵器蓋はどちらも口縁部がわずかに湾曲して平坦部をなすが、平坦部から緩やかに立ち上がりながら天井部まで丸みを持つ1と、平坦部から緩やかに立ち上がるものの天井部は平らになる2がある。

1は口縁部から平坦部の外面には自然釉がかり白色を帯びる。内外面ともロクロ調整によるナデ整形である。色調は灰色を呈し、胎土に白色粒子と細砂を含む。

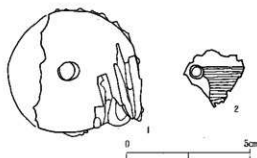
2は天井部の平らになった部分はケズリによる整形であり、この項目でしっかりと稜がつく。それ以外の部分はロクロ調整によるナデであり、内面もナデによる整形である。

3は須恵器高環の脚部である。整形は内外面ともロクロ調整によるナデである。焼成は良いが色調は赤褐色で、胎土に白色・黄色粒子を含む。

4は須恵器甕の口縁部である。口縁部はゆるく外反し、口縁からわずかに下がったところに幅・厚さ5mmほどの鈎状の突帯を付け、頸部は強く「く」の字状に立ち上がる。色調は褐色を呈し、焼成が甘くややもろい感じである。整形は内外面ともにロクロ調整によるナデである。



第8図 2号住居址 出土遺物実測図(1:3)



第9図 2号住居址 出土遺物実測図(1:1.5)

このほかにも本址からは2点の鉄製紡錘車が出土している(第9図)。1は端の4分の1ほどを欠くが直径4.9cm、厚さはおよそ4mm、最大厚1.2cmを測る。表裏面に植物質の付着物が見られるが、表面がより多い。ほぼ中央には幅約7mmの軸の痕が両面にわずかに見られるが、折れてしまって残っていない。2は細かく壊れてしまっているため、図化できたのは軸のある中心部のみであり、大きさなどは計測できない。これにも植物質の付着物が認められる。

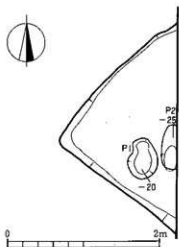
須恵器蓋から本址は8世紀中頃に位置づけられるであろうか。

(3) 3号住居址

遺構 本址は1・2・3住の3棟が重なるもつとも南側に位置する住居址である。わずかに住居の西壁隅を発見できただけで遺構のほとんどが調査区外へと延びているため、住居址の規模は明確にで

きなかった。

1住の調査終了後に貼床を剥ぐと、本址の壁の立ち上がりが確認され、南壁の掘り込みは16cmであった。また南壁際にP1・P2の2基のピットを発見したが、これらは1号住の貼床の下から検出されたため本址に伴うピットと考えられる。特にP2は北壁方向へ斜めに掘り込まれたピットであり、本址の柱穴と考えられる。



第10図 3号住居址 平面図 (1:50)

これら3棟の住居址の重複関係については、1住が2・3住覆土を掘り込んで構築しており、重複部分には貼床を施しているため、1住が最も新しい住居址である。また2住の床下から3住の落ち込みが発見されたが、床面は3住の床面が2住の床面より約4cm低いことから、3住が最も古い住居址であると考えられる。したがってこれらの住居址は古いほうから3住→2住→1住の順に造られたと思われる(第10図)。

遺物 わずかに土師器片1点、須恵器片5点が出土するだけであり、図化できるものはない。

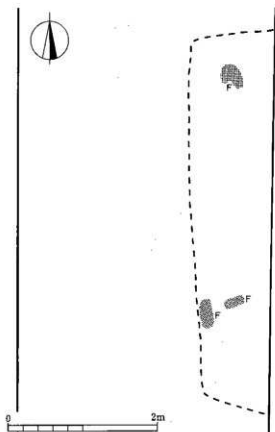
(4) 4号住居址

遺構 本址はB-23~26グリッドに位置しているが、攪乱を受けているために遺構のほとんどが破壊されており、住居址の壁や明確な床面は発見できなかった。部分的に残存していたわずかな床が住居址を示す根拠となり、その存在を確認することができた住居址である。このわずかな床面から平面形を推測して調査したが、住居址の西壁付近と思われる所に2箇所と、北西隅と思われる所に1箇所の焼土が発見されただけである。遺物は明らかに覆土と断定できる土層からは出土していない(第11図)。

(5) 5号住居址

調査の経過 表土剥ぎを行うと暗褐色土中に須恵器煮の大型な破片が出土し、その周辺からも土師器破片が集中して出土した。遺構検出では攪乱による遺構の破壊が激しいため、平面形は不明瞭であったが、覆土を掘り進めると、周溝や床面の発見により住居址であることが明らかとなった。

遺構 本址はG・H-60~62グリッドに位置する。住居址の東側は攪乱を受けており、北東隅から東壁と南壁が発見されたが、西壁は調査区外へと

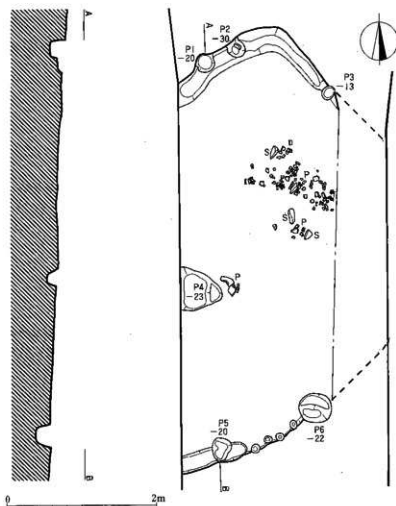


第11図 4号住居址 平面図 (1:50)

延びていた。

竪穴の大きさは南北4.8m、平面形は隅丸方形である。掘り込みは北壁で約5cm、南壁で約3cmと浅く壁はほとんど残っていない。床は黄色砂礫層を掘り込んでいるために礫が露出している部分があり、緩やかに南に向かって傾斜してはいるものの、ほぼ平らに整地される。東壁近くの床面から土師器壺の破片が出土し、その周辺の床には叩き面が見られる。周溝は発見された壁際全体に巡り、幅は約25cmで、深さは1～2cmと浅い。住居中央付近にP4が発見され、周溝の中にP1～P3とP5・P6のような小穴が見られる。これらはいずれも直径25cm前後、深さ20cm前後と斉一性があり、P1・P2の間隔は5cmと狭いもののP2・P3とP5・P6の間隔は約15cmである。若干住居址の内に向かって傾きを持っていることから、壁柱穴であったとも考えられる。

カマドの位置は南壁に焼土や構築材の痕跡がなく、また東壁付近から住居址の中央部にかけて遺物が出土していることから、北壁か東壁にカマドがあったと考えられるが、東壁は擾乱を受けているため確認できない(第12図)。

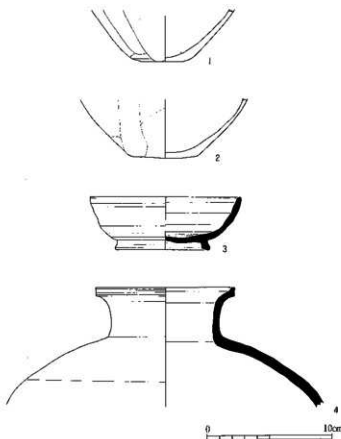


第12図 5号住居址 平面図(1:50)

遺物 遺物の出土はそれほど多くなく、土師器片221点、須恵器片14点が出土している。このうち図化できたのは土師器2点と須恵器2点の計4点である(第13図)。

1・2は土師器壺底部である。どちらも器壁が3～4mmと極めて薄く、上から下へヘラケズリを施し

ている。胎土は細かな白色・黒色粒子を含むが緻密であり、焼成も良好である。底部がわずかにふくらんでいるため安定は悪い。内面は押さえた後で丁寧になでてあり、その痕をほぼ消している。色調は、1は内外面とも褐色であるが2は内面が暗褐色を呈する。これらと良く似た非常に薄手の土師器甕胴部



第13図 5号住居址 出土遺物実測図 (1:3)

片が多く出土していることから最低2つの薄手の土師器甕があったと思われるが、底部以外は復元不可能であった。整形の特徴から武蔵型甕であろう。

3は図上復元できた高台付の須恵器杯である。底部からあまり稜を持たずにわずかに内湾しながら口縁部へと緩やかに立ち上がり、口縁は丸みを持つ。高台は踏ん張らず角張っており、接合面はあまり目立たない。焼成は良好だが胎土に白色粒子と砂粒を含む粗い土のため、所々アバタ状に孔があく。表面は青灰色を呈するが、内部は赤褐色である。内外面ともロクロナデによる整形である。

4は須恵器甕の口縁部である。球形に張り出した胴部から立ち上がる頸部は真っ直ぐに立ちあがり、口縁部に向かって外反していく。口縁部はわずかに湾曲しながら再び真っ直ぐ立ちあがる。内外面ともロクロ調整によるナデで、胴部に緑

色の自然釉がかけられ、火前の面は釉が幾筋か流れている。

本址の遺物は甕や環から8世紀中頃に比定されると思われる。

(6) 6号住居址

調査の経過 表土削ぎを行うと、褐色土層を掘り込む竪穴を発見した。当初は1棟の住居址と思われ、覆土の観察でも重複は発見することはできなかったが、覆土を掘り進め、床面のレベル差や住居址の壁に不整形な部分があることによって重複を確認することができた。

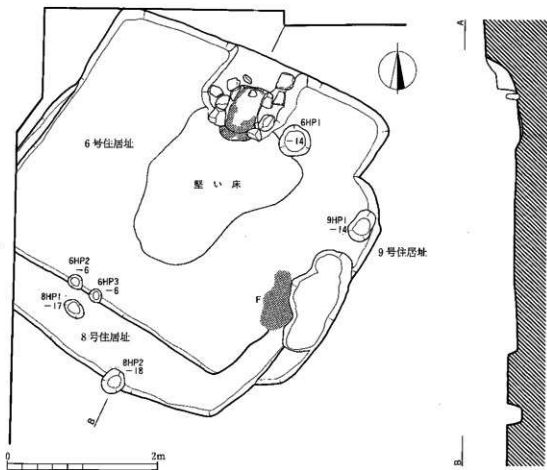
遺構 本址はG~I-85・86グリッドに位置し、竪穴は南側・西側を8住と、東側を9住と切り合っている南北3.8mの隅丸方形の住居址である。

残存する竪穴の壁は北壁で約35cmあり、周溝は確認できなかった。床は住居址中央部からカマドの焚口までを堅く叩き締められている。その他の部分は砂礫層を掘り込んでいるため礫が露出している所があるが、踏みしめた堅さをもつ床である。床面検出時に合計3つのピットが検出された。P1はカマドの東側に位置し径40cm、深さ約15cmであり、土師器杯・甕片が出土した。P2・P3は南壁中ほどに位

置き、壁にかかる小穴である。どちらも径が約18cm、深さ約7cmであり、南壁のほぼ中央にあることから住居址の出入り口部分の構造に関わりのあるピットかと思われる。

カマドは北壁のほぼ中央にあり煙道や天井部分は崩れてしまっていたが、左右両袖部分の残存状況は良好であった。袖石は大きさが20cmほどの石を用いているが、焚口付近の袖石は床直もしくは2～6cmほど床面に埋め込まれている。それより奥にある袖石は床面に置いた石の上にもう一つ石を置いて高さを出し、黄褐色粘土質の構築材で固定してある。カマドの奥壁寄りには幅約10cm、高さ約14cmの支脚石が残っていた。焚口部分は床面から4cmほど下がりが、カマド内の火床面は南北24cm、厚さ3cmでよく焼きしまり全体に赤く変色している。

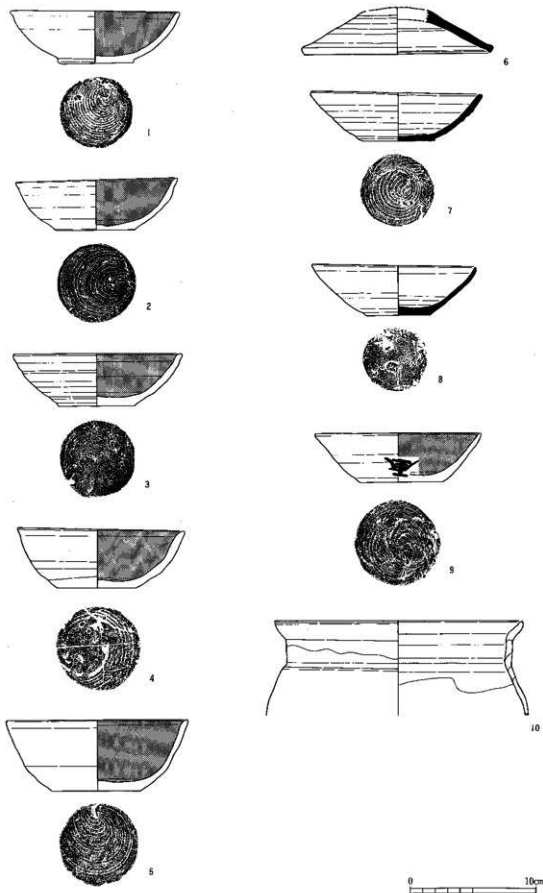
また、現在の火床面の北側、約3cm下からもう一つの火床面が発見された(第14図)。



第14図 6・8・9号住居址 平面図 (1:50)

遺物 土師器片500点・黒色土器片90点と土師器を多く出土した住居址である。須恵器はわずかに43点しか出土していない。この中で図化できたのは土師器甕の口縁部1点、黒色土器環5点、須恵器環3点である。黒色土器のうち9は墨書土器である(第15図)。

1～5は黒色土器環である。1はロクロで挽き出してから糸切りによって切り離す際、底部に少し余分に厚みを取り、擬高台状を呈する。外面はロクロ調整によるナデであり、内面は丁寧な横へらミガキが施される。部分的に元の器面の褐色が見える。色調はやや白っぽい褐色であるが、口縁部は部分的に黒色化する。胎土には白色・黒色粒子や細砂を含む。



第15图 6号住居址 出土遺物実測图 (1:3)

2は底部に糸切り痕が見られ、わずかに立ち上がりが認められるが1ほど顕著ではない。胴部はふくらみを持って立ち上がり口縁部はわずかに外反する。整形は外面がロクロ調整と思われるナデ、内面は口縁部が丁寧な横ヘラミガキであるが胴部はやや粗いヘラミガキを施す。外面の色調は褐色であるが、何かが付着したように暗褐色や黒色の部分が多い。胎土には白色粒子と細砂を含む。

3は底部に糸切り痕が見られ、胴部にはロクロで挽き出した時の痕跡がはっきりと見られる。口縁部から底部にかけて黒色変化する部分がある。口縁部内面の整形は横ヘラミガキであり、胴部にも丁寧なヘラミガキが施される。外面の色調は褐色で、胎土には白色・赤色粒子と細砂を含む。

4の底部には糸切り痕跡も見られるが、それを磨いた後で「十」字形にヘラ描きによる刻線が施している。底部から1cmほど上まではヘラケズリされており、なだらかに立ち上がるがそれより上はわずかなふくらみを持って口縁部に至り、口縁は若干外反する。内面の整形は口縁部が横ヘラミガキ、胴部はヨコナデの上からヘラミガキが施されている。外面の色調は褐色だが、口縁部はやや黒味を帯びる。

5はP1から出土した黒色土器坏である。この柱穴から黒色土器坏3分の2個体や坏底部、土師器甕片が出土している。図化した坏は底部に糸切り痕が見られ、ややふくらみを持って立ち上がった後直線的に口縁部が上がっていく。口縁は若干外反し丸みを持つ。内外面ともロクロ調整によるナデであるが、内面の底部は回転させながら丁寧なヘラミガキを施している。胎土には白色・赤色粒子と微細な雲母片を含み色調は褐色を呈する。口縁部はやや暗い色調になる。

6は図上復原できた須恵器蓋である。口縁部がわずかに立ち上がり、平坦部を形成せずに緩やかに上がっていく。天井部は盛り上がる様に若干高くなる。整形は外面がロクロ調整によるナデであるが、天井部の高くなる部分はヘラケズリが施され、内面もナデであるが天井部に近い所は磨いたようになっていく。色調は白っぽい灰色をしており胎土に白色粒子と細砂を含む。

7・8は須恵器坏である。7は底部に糸切り痕が見られ、擬高台状の立ち上がりがわずかに見られる。器壁は4mmと薄く、緩やかに立ち上がっていく。胎土に黒色粒子と砂礫を含み、凹凸が目立つ。色調は灰白色を呈する。

8も底部に糸切り痕が見られる。器壁は3mmと薄く、直線的に立ち上がる器壁にはロクロで挽き出した痕跡も見られるが、ナデられているためそれほど顕著でない。胎土には細砂と微細な白色粒子を含み色調は灰色である。底部にはセメント状の付着物が見られるほか、ヘラ状工具で引っかいたり突いたりしたような痕跡も見られる。

9はカマド東側から出土した黒色土器坏であり、墨書が見られる。底部には糸切り痕が見られ胴部はやや直線的に緩やかに立ち上がる。ロクロ調整のナデによる整形で、色調は褐色であるが口縁部は黒色変化する。底部内面の整形は丁寧なヘラミガキが見られ、口縁部から胴部上半分ほどは横ヘラミガキを施す。胎土に白色粒子と細砂を含む。墨書は何かの文字であると思われるが、読み方は全くわからない。近隣市町村では松本市の下神遺跡で同様の墨書土器が200点以上出土している。また類似する文字が秋田県の弘田番に見られるほか、関東地方の出土例が増加しているようである。則天文字の可能性が指摘されている。

10は図上復原できた土師器甕の口縁部である。緩やかに胴部が立ち上がり頸部からコの字状で口縁部につながっていく。胴部整形は横ヘラケズリであり、粘土の接合面が見られる頸部から上はナデによって整形される。頸部の粘土の接合面には不明瞭な指頭痕が見られることから接合した粘土を指で押さ

えてなじませた後ナデで整形したことがわかる。内面もナデによる整形であるが、胴部と頸部の3個所に粘土の接合面が見られ、これだけの短い部分にもかかわらず4個所で粘土を接合していると思われる。胎土には細かな雲母片と白色・赤色・黒色粒子を含み、色調は褐色を呈する。外面の頸部より下に黒色付着物が見られる個所がある。整形の特徴から武蔵型であろう。

環の形態から本址は9世紀の前半から中頃であると考えられる。

(7) 8号住居址

遺構 本址はG・H-86・87グリッドに位置している。住居址堅穴は北側の大半を6住によって壊されているが、東壁から南壁と西壁の一部が発見されたことから、東西4.6mの隅丸方形の住居址と推測された。掘り込みは南東隅で約9cm、西壁で約23cmを測るが、周溝は見られない。床面検出時に二つの小穴が発見されているが柱穴とは考えられない。

6住の東壁付近に南北82cm、東西35cmの範囲に焼土が検出された。この焼土が本址のカマドの痕跡と考えられる。

遺物は6住と切り合っているためその多くが6住に混入している可能性がある。明確に本址に属すると思われる遺物は出土していない(第14図)。

(8) 9号住居址

遺構 本址はI-86グリッドに位置し、そのほとんどを6号住居址によって切られている。このためわずかに東壁が確認できただけであり、大きさは不明である。掘り込みは残っている東壁で約29cmと比較的深い。周溝は見発されていない。床面検出時に住居址の北東隅に柱穴のようなP1が検出された。南北約44cm、東西約36cm、深さ約12cmの楕円形の小穴である。

カマドは、先の項ですでに触れたように6住カマドの火床面を半載したところ2個所に焼土が見られた。南側にみられた焼土は6住にともなう焼土である。もうひとつはこれより20cmほど北寄りにみられ、6住のカマドの底面よりも約3cm下にあり、厚さ5cm、南北の長さは約20cmであった。6住の床面の高さや焼土の位置から考えて本址のカマドがほぼ同じ場所にあり、これを壊して6住のカマドが作られたのではないかと推測される。

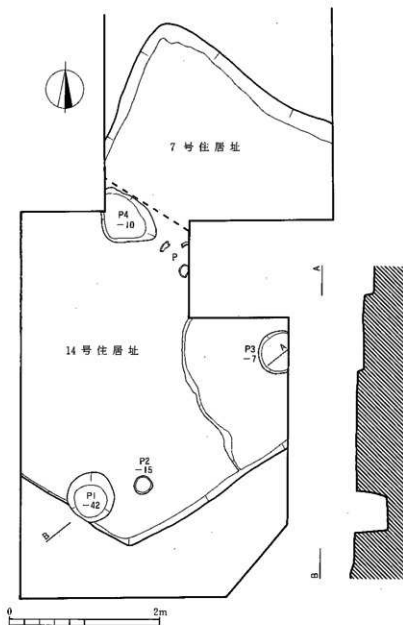
以上、6・8・9住の切り合いについて整理しておくと、カマドを伴う6住が最も新しく、また東側で9住の堅穴を8住が切っていることや、9住の床面の上に8住のカマドの痕跡である焼土が見られることから、9住が最も古く、8住→6住の順に新しくなる(第14図)。

(9) 7号住居址

遺構 本址はG・H-94・95グリッドに位置し、平成10年度に北壁西隅の調査を行った。

住居址の堅穴はそのほとんどが調査区外へと延びているため大きさは確認できなかったが、掘り込みは西壁で約27cm、東壁で約24cmと比較的深い。周溝は確認されなかった。床はほぼ堅く踏みしめてある

が、北壁隅の床面には地山の礫が露出している。カマドは平成10・11年度どちらの調査でも焼土や構築材が見られないため、調査区外にあるものと思われる（第16図）。



第16図 7・14号住居址 平面図 (1:50)

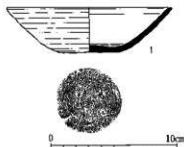
平成11年度では本址の南壁の発見を想定し、G・H-95・96グリッドの調査を行った結果、方形の住居址が検出された。当初これは7住と考えられたが、調査をすすめるにしたがい、前年度調査した床面とレベル差があり、平面形も住居址の主軸があわないことなどから、これは本址より後に構築された別の住居址であることが確認された（14号住居址）。

遺物 本址からは土師器片125点、須恵器片32点が出土しているが、今回図化できたのは須恵器環1点のみである（第17図）。

この須恵器環は底部には糸切り痕が見られ、ほとんどふくらみを持たずに口縁部へと立ち上がる。器壁は3mmと薄く口縁はやや外反する。内外面共にロクロから挽き出した痕跡ははっきりと見られ、ナデ

による整形をしている。胎土に赤色粒子と砂粒が見られ、焼成は良好であるが色調は褐色を呈する。

9世紀前半から中頃の遺物であると思われる。



第17図 7号住居址 出土
遺物実測図 (1:3)

(10) 14号住居址

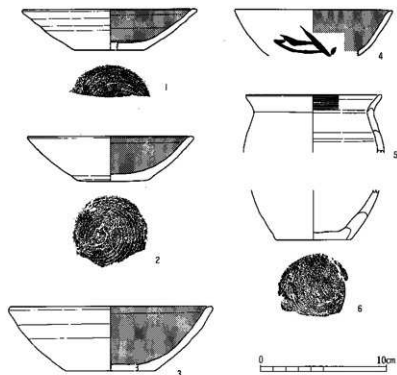
遺構 本址はG・H-95・96グリッドに位置している。ここは平成10年度に7住が発見された南側にあたる。このため当初本址は7住と考えられていたが、7住との床面のレベル差が約6cmあることや住居址の主軸方向が7住とは異なることから、もう1棟別の住居址であると推測された。

この竪穴は南壁と東壁の一部が発見されただけであるため、大きさは不明である。掘り込みは南壁で9～12cmを測る。住居の東側に床面から8cmほど下がる浅いくぼみがあり、基底部は地山の黄褐色土まで掘りくぼめられている。床は砂礫層まで掘り込んであり、所々礫が露出しているが、暗褐色土の踏み固められた堅さをもつ床である。床面検出時に南側隅にP1が検出された。これは径約53cm、深さ約42cmあり、この住居址の柱穴と考えられる。ほかにP1の東側に径約22cm、深さ約16cmのP2や、浅い凹みの中にP3が検出された。これは径約55cmであるため本址の柱穴かとも思われるが、浅い凹みの性格がはっきりしないためにこのピットも柱穴であるか不明である。またP4は7号住の西壁側に発見された南北78cm、東西65cm、深さ11.5cmの三角形の凹みである。カマドの西側に位置しており本址に伴うと推測される。P4の東側には土師器坏などが集中して出土する個所があり、その周辺に構築材や焼土粒子が多く発見された(第16図)。

遺物 本址から土師器片363点、須恵器片25点、灰軸陶器片2点が出土したが、その中から6点を図示した(第18図)。

1～4は黒色土器の坏である。1の底部には糸切り痕が見られ、胴部は直線的に伸びて口縁は外反気味に立ち上がり口唇部は肥大し丸みを持つ。外面はロクロナデによる整形であり、内面は丁寧なヘラミガキが施される。胎土には雲母片を含み、色調は褐色を呈するが、部分的に黒色のシミが見られる。内面は黒色というよりは暗褐色であり、口縁部に上がっていくにつれて色調も明るくなる。

2はカマドと思われる調査区に近い場所から出土したもので、やや肉厚な感じを受ける。胴部がわずかに膨らみながら立ち上がり、口縁部は丸みを持つ。整形は内外面ともロクロ調整によるナデである。胎土には白色粒子と細砂、雲母片がわずかに見られ、色調は褐色であるが、胴部に灰白色の付着物が見られる個所や色調が暗くなる部分がある。底部には糸切り痕が見られるが、混入物のためかアバタ状に



第18図 14号住居址 出土遺物実測図 (1:3)

孔があいたりヒビのように筋がはいる。

3は胴部が若干膨らみながら立ち上がり、口縁はやや肉厚になりわずかに外反する。外面はヨコナデであり、内面は口縁部が丁寧に横ヘラミガキされ胴部にも丁寧なヘラミガキが施される。底部は糸切りによってロクロから切り離されるが、磨いてあるため糸切り痕は極めて不明瞭である。胎土には白色粒子を含み色調は褐色である。部分的に暗褐色のタール状のシミが見られる。

4は黒色土器坏で墨書が見られる。器壁の厚さは4mmと薄手であまりふくらみを持たずに口縁部へと立ち上がり、口縁は若干外反する。外面の整形はロクロ調整によるナデであり、内面はヘラミガキが施される。色調は褐色を呈し、胎土に黒色粒子が含まれる。墨書は文字というよりは記号に近く、何を意味するのか不明である。

5はやや薄手の土師器小型甕の口縁部である。粘土ひもを積み上げて成形しており、胴部はそれほど張り出さない。外面は全面ナデによる整形であり、胴部内面は横方向のナデ、口縁部から頸部の内側は横方向のハケメが見られる。胎土にあまり砂粒を含まず赤味を帯びた褐色を呈する。

6は薄手の土師器小型甕の底部である。やはり粘土ひもを積み上げた成形であり、底部には糸切り痕が見られる。胴部へはそれほど張り出さずに立ち上がっていく。内外面ともに横方向のナデによる整形である。5・6はどちらもP1内から出土しており、接合しないが同一個体の土器であると考えられる。坏から本址は9世紀前半から中頃に比定されよう。

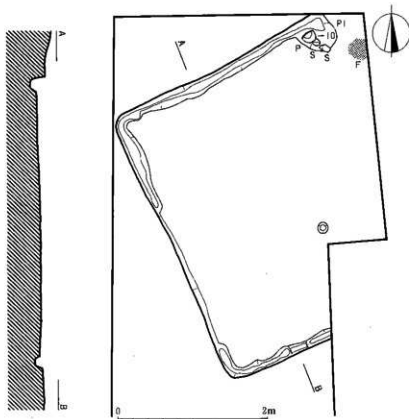
(II) 10号住居址

遺構 本址はA・B-117~119グリッドに位置し、竪穴の大きさは南北3.8mの隅丸方形の住居

址であるが、東壁が調査区外に延びているため東西の大きさは不明である。

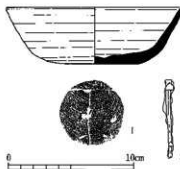
住居址の掘り込みは北壁では約10cm、西壁でも約13cmを測るが、南壁は5cmほどである。周溝は幅20cm、深さ6～10cmで、北壁から西壁3分の1と、南西隅から南壁にかけてみられる。南壁の周溝は調査区の壁の中へと続いていくため南壁にも周溝が回っていたと考えられる。黄色砂礫層まで掘り込んだ床はわずかに礫が露出するが、全体的によくしまった堅い床である。

カマドは、西壁にはカマドの痕跡は見られず、北壁に須恵器坏を出土したP1が見られ、その東側には厚さ1cmほどの焼土が見られたことから北壁際にカマドがあったと考えられる（第19図）。



第19図 10号住居址 平面図 (1:50)

遺物 土師器片42点、須恵器片2点と遺物の出土量が少ない住居址である。今回は北壁付近のピットから出土した須恵器坏1点が図化できた（第20図1）。



第20図 10号住居址 出土
遺物実測図 (1:3)

この須恵器環は底部から立ち上がる部分にはヘラケズリが施され、胴部にあまりふくらみを持たず直線的に口縁部へと上がっていく。胴部から口縁部まではロクロ調整のナデが見られ、内面もナデによる整形である。胎土に白色粒子を多く含む色調は灰色であるが、タール状のシミがつき黒色変化する部分が見られる。底部は糸切りで切り離れた後にヘラミガキを施すが、若干糸切り痕が残る。

このほかに本址からは鉄製品が1点出土した(2)。形態から考えて釘であると思われる。長さが約6cmであり断面は三角形をしている。

坏から8世紀後半に位置づけられようか。

(12) 11号住居址

調査の経過 調査区の表土を剝ぐと暗褐色土で小石や礫を多く含む土層から、須恵器環や土師器甕の破片が多く出土した。掘り進めていくとしだいに大型の破片も出土するようになったため、住居址を推定しながらさらに掘り進めを行うと、炭化材を多く含む覆土中から須恵器環の2分の1個体破片や銅製の蛇尾2点、円面硯の破片3点が出土した。平面形は褐色土層を掘り込んで堅穴が掘られているため、土層の違いを明確にとらえることができた。

これら遺物は住居床面より40cm～1mほど高い位置から出土しており、住居内に残された遺物ではなく埋没過程において捨てられたものと思われる。

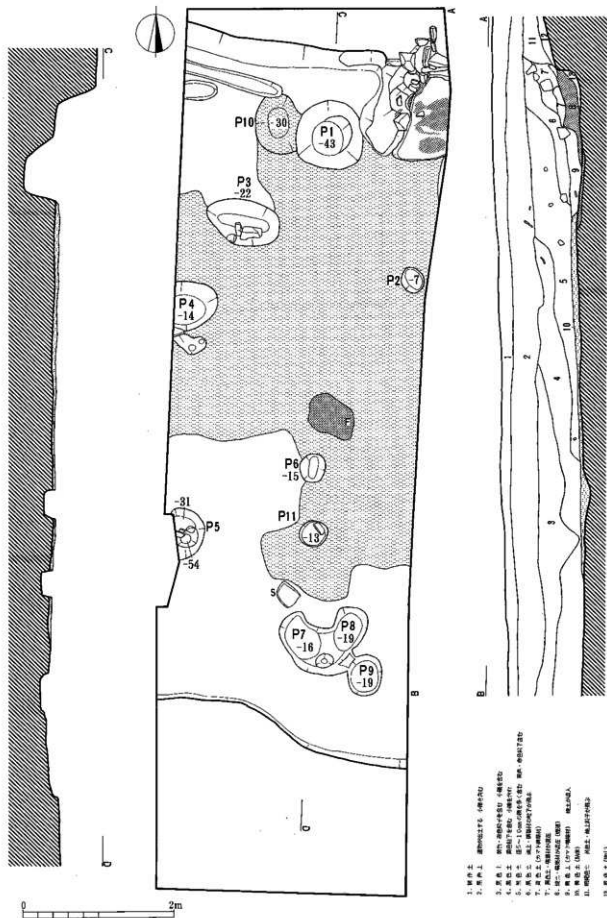
遺構 本址はG・H-12～17グリッドに位置している。主軸がほぼ南北を向いており、南北9.2mを測る大きな住居址である。

残存する壁の掘り込みは北壁で41cm、南壁ではわずかに9cmほどしか見られない。東西の壁は調査区外となる。周溝は北壁下の調査区壁からカマドの手前1mほどの所まで延びるものと、そのすぐ南側に約45cmほど延びる2本が見られる。幅はどちらも18～21cm、深さは北側の周溝が3～4cm、南側の周溝が約10cmである。床は北から南に向かってわずかに傾斜している。カマドの焚口から広い範囲に黒色砂礫層の上に厚さ8cmほどで黄色土の貼床をしてある。貼床をしていない部分でも堅く叩きしめた床を構築している。住居址内には柱穴が11箇所検出されているが、住居址全体で考えるとわずかな部分しか発見されていないため、支柱穴は不明である(第21図)。

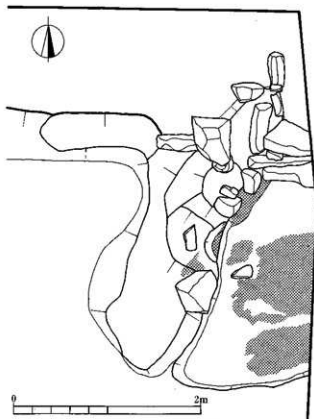
カマドは北壁に西半分が検出され、東半分は調査区外になる(第22図)。天井部は崩れてしまっているが袖部分には構築材や袖石が残っている。袖石は地山に埋めて固定しておらず、すべて床上に構築材で固定されていた。この構築材の中から土師器甕片が出土したり焼土が検出された。またカマド南側の貼床の下に焼土が確認されている。周溝が北壁際で2本発見されていることなどを考え合わせると、住居が北側へ拡張されたことが考えられる。

遺物 本址は今回の調査の中では最も豊富に遺物が出土した住居址であり、土師器1,728点、須恵器片904点であり、金属器も6点出土した。これら出土遺物の中には貴重な発見もある(第23図～第25図)。

第23図1は土師器長胴甕の口縁部である。粘土ひもを積み上げて成形しており、外面の整形は口縁部や頸部がヨコナデであり、胴部はハケメとケズリによる。ハケメはあまり顕著ではないため、まずハケメで調整を施した後、下から上へケズリによる整形を行っている。内面は口縁部が横方向のハケメがみ



第21区 11号住居址 平面图 (1:50)



第22図 11号住居址 カマド平面図 (1:40)

られ、胴部はハケメ調整である。色調は褐色であり、内面のほうがより明るい褐色である。

2は黒色土器甕の口縁部である。粘土を積み上げて成形しており、内外面共にヨコナデによる整形である。内面の頸部下に粘土の接合面の筋が見られる。外面の色調は白っぽい褐色を呈し、胎土に雲母片を多く含み、白色細砂も見られる。

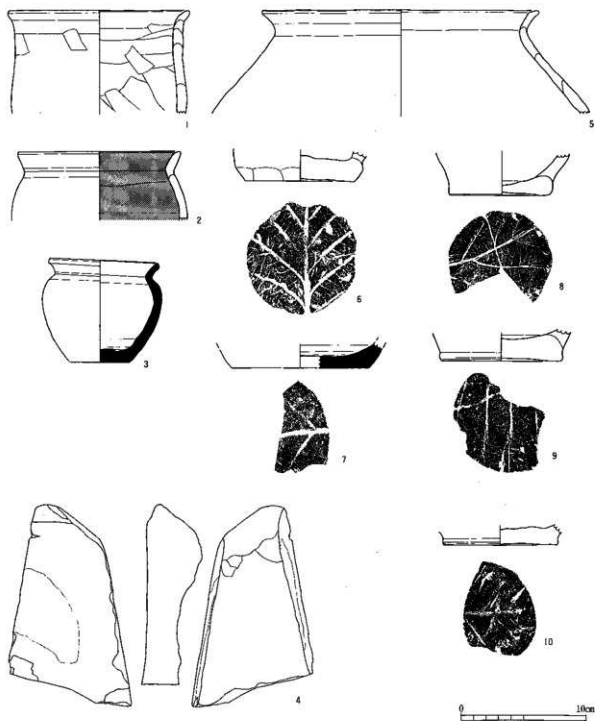
3は須恵器小型甕である。底部からふくらみを持って立ち上がり、口縁はわずかに内湾する。ロクロ調整によるナデであるが、底部と底部の立ち上がりはヘラケズリされる。内面の底部にはロクロから挽き出す時にできた突起が残る。色調は灰色であるが、外面は火前の方向に自然釉がかかったり胴部に焼きムラが見られるため、くすんだ緑色や黒色の部分が多く見られる。内面も口縁部には自然釉がかかり白っぽい緑色で、胴部は赤味を帯びた灰色の部分が多く見られる。

5は土師器甕の口縁部である。粘土を積み上げて成形しており、内外面共にヨコナデによる整形である。色調はやや白っぽい褐色を帯びて、胎土に白色・乳白色粒子や雲母片を含む。

6～10は土師器甕の底部である。どれもぼったりと1cm以上の厚みをもった作りになっており、底部からの立ち上がりには粘土の接合面が見られ、底面には木葉痕が見られる。図化できないほどの破片も含めると本址からは木葉痕のついた土師器甕の底部が10点以上出土している。

第24図1は黒色土器坏である。やや丸みを持った底部からわずかに膨らみながら立ち上がる。器壁が厚めでややぼったりした感じがあるが、口縁部はすっきりとする。整形をみると底部はケズリ、胴部はヨコナデで内面には丁寧なヘラミガキを施している。色調は褐色を呈し、胎土に白色粒子と微細な雲母片を含む。

2～4と14は高台を持たない須恵器坏である。2は胴部に若干のふくらみを持ちながら緩やかに立ち

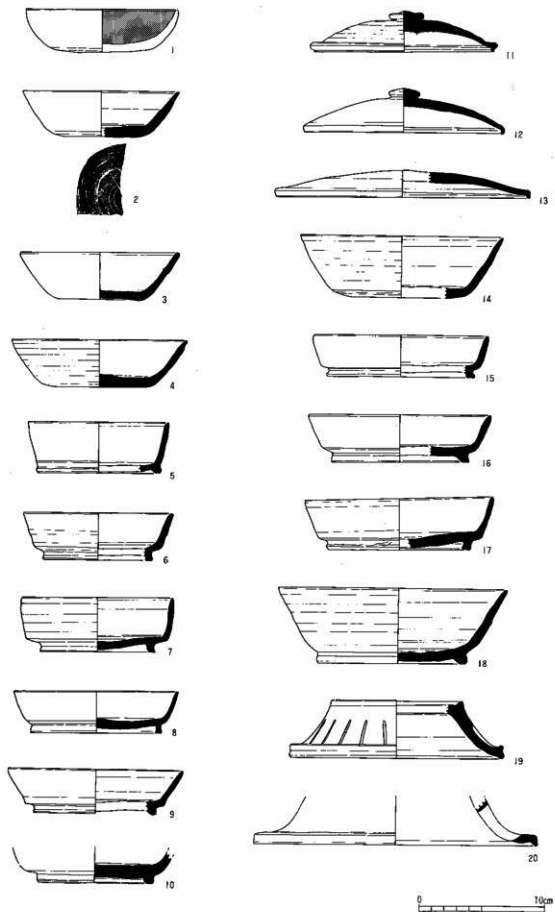


第23図 11号住居址 出土遺物実測図 (1:3)

上がり、胴部中程から口縁部までは器壁が薄くなる。整形は内外面ともロクロ調整によるナデであり底部はヘラキリで切り離してある。またヘラ描きのような刻線が見られる。

3は器壁が5mmほどで胴部はほとんどふくらみを持たず直線的に立ち上がり、口縁部は丸みを持つ。口縁部までがほぼ同じ厚さの器壁で立ち上がるためか、若干厚ぼったい感じがある。内外面ともにロクロナデによる整形であり、底部の切り離しはヘラキリと思われ、ヘラでこすったような痕が見られる。口縁部が黒色変化するが灰白色の軟質須恵器である。

4はふくらみを持たずに立ち上がる。口縁から4mm下で急に薄くなり、わずかに外反する。内外面と



第24图 11号住居址 出土遗物实测图 (1:3)

もナデによる整形であり、底部はヘラキリで切り離している。この底部は1cmほどの厚さで円形の底を作り、そこに粘土を積みロクロ調整してある。色調は灰色で、底部の内外面に火だすきを残す。

14は本社のカマドから出土したものである。わずかにふくらみを持って立ち上がり、口縁部は若干外反する。内外面ともにヨコナデによる整形である。底部はヘラキリによって切り離される。色調は灰色であるが、部分的に黒味を帯びたり黒色変化する。胎土には白色粒子や細砂を含む。

5～10と15～18は高台を持つ須恵器坏である。5は外側に短く踏ん張った高台からほぼ真っ直ぐに口縁部へと上がっていく。整形はロクロ調整によるナデであるが、高台部分との接合面はひびが入っている。胎土は緻密で混入物が見られず灰白色を呈し、焼成は良好である。

6は底部からゆるい稜を持って口縁部へと立ち上がる。口縁は外反せず、やや厚手であり高台はあまり踏ん張らない。内外面とも整形はロクロ調整によるナデである。

7はほぼ平らな底部から90度に近い角度を持って急に立ち上がる。立ち上がりの部分の内面には幅2mmほどで浅く溝状に窪む。整形は内外面ともロクロ調整によるナデであるが、底部は高台の内側に顕著にヘラケズリが見られる。色調は灰色を呈し、胎土に白色粒子と細砂を含む。

8はほぼ平らな底部から若干外にひらき気味で立ち上がり、器壁は3mmと薄い。胴部はナデによる整形であり、底部はヘラケズリの後などで調整を施す。高台は踏ん張らずすっきりと立ち上がる。

9は底部からしっかりと稜がついて直線的に伸び、開きながら立ち上がる。外面には全面に茶褐色の自然釉がかかる。高台はやや踏ん張っており、あまり丁寧に接合されていないため筋が残る。ナデによる整形であり、胎土に白色粒子と細砂を含む。

10は底部からの立ち上がりに明確な稜を持たない。ナデによる整形であるが、混入物のためかアバタ状に孔があく。高台はあまり踏ん張らずぐんぐりと短い。高台の内側にはケズリの痕が顕著に見える。胎土に白色粒子と砂粒を多く含み、色調は灰青色を呈する。

15は底部から緩やかに立ち上がり口縁は丸みを持つ。ロクロ調整によるナデであり、踏ん張っている高台は接合面にヒビが見える。色調は外面に自然釉がかかり若干薄緑色を帯び、胎土に乳白色粒子が含まれる。

16は底部からゆるい稜をもって立ち上がり口縁へと広がっていく。ロクロ調整によるナデである。高台は若干踏ん張っているが、接合面にはヒビが入る。色調は白味を帯びた灰色であり胎土に白色粒子と細砂を含む。

17は底部からしっかりと稜をもちまっすぐ口縁部へと立ち上がる。口縁はわずかに外反する。高台はあまり踏ん張らないが、部分的につぶれたようになっている。胎土には白色・黒色粒子を含み、色調は灰白色を呈する。

18はP10から出土した口径18.2cm、器高5.9cmの比較的大きな坏である。底部から緩やかに立ち上がり、開き気味に口縁へと立ち上がる。整形はロクロナデであるが底部の高台より内側はケズリによる。高台は短く踏ん張っている。色調は外面に釉がかかって黒灰色を呈する。

11～13は須恵器蓋である。11は口縁部が強く湾曲して平坦部をなし、緩やかに天井部へと続いていく。擬宝珠状つまみから2cmほど周囲にケズリが見られるが、その他の部分は内外面ともにロクロ調整によるナデである。色調はやや黒味を帯びた灰色であり胎土への混入物はほとんど見られない。

12は口縁部が湾曲することなく緩やかに天井部に至り、擬宝珠状つまみが付く。整形は内外面共にロ

クロ調整によるナデである。口縁の立ち上がりの部分は後から付けたようである。色調は白味を帯びた灰色であり、胎土には白色・黄色粒子と細砂を含む。

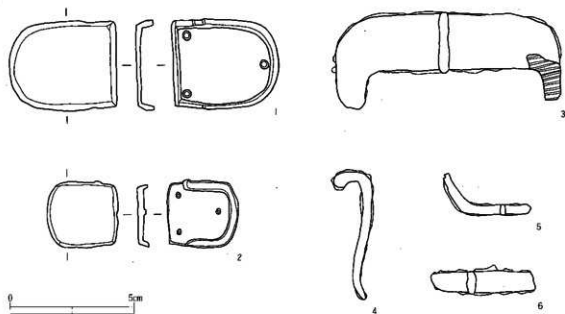
13は口縁部がほとんど湾曲せずに平坦部を作りだらだと天井部へ続く。外面に厚く茶緑色の自然釉がかかり、内面はナデによる整形である。色調は灰色である。

19と20は円面碗の脚部である。19は碗の海の部分がわずかに残り、脚部には長さ2.4cm、深さ約3mmのヘラ描きの線が1.5cmほどの間隔で入れられる。整形はナデで、内面には自然釉がかかる。20は真つ直ぐ立ち上がった後、いったん平坦部をつくってから緩やかに立ち上がっていく。長さ3.5cmのスカシが入ると思われる。スカシの下に幅1mm程度で溝状の線が入る。

第25図は本址出土の金属器である。1・2は青銅製の蛇尾である。1は長さ3.6cm、幅4.3cm、厚さ1.5mm、最大厚6mmであり、内面に3個所の突起が見られる。薄手だがしっかりしている。2は長さ2.6cm、幅2.9cm、厚さ2mm、最大厚4mmと1より小ぶりで、やはり内側に3個所の突起が見られる。1と比べて厚手で脆い。

3は麻皮剥器であるが、市内でも発見例は少ない。基部には着柄痕が見られる。6は鉄製の刀子片である。

坏や蓋から本址は8世紀の始めころに比定される。



第25図 11号住居址 出土遺物実測図 (1:1.5)

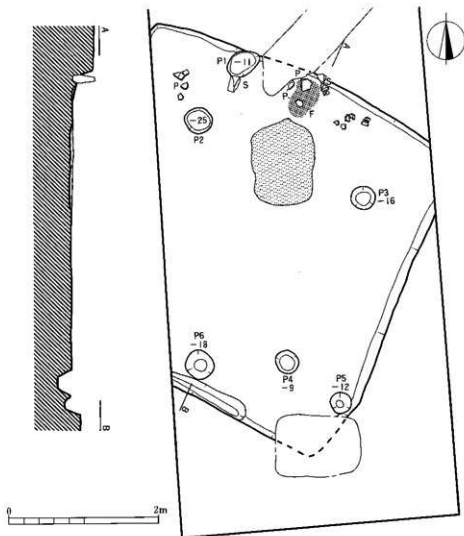
(13) 12号住居址

遺構 本址はA・B-99~101グリッドに位置し、竪穴の大きさは南北4.5m×東西4.5mの隅丸方形の住居址である。

住居址の掘り込みは北壁で30cm、東壁では23cm、南壁は16cmを測り、比較的深い住居址である。周溝は南壁にみられ、幅19~24cm、深さ2.4~6cmである。床は地山の礫が多く見られるが、叩きしめた様

子が見られない軟弱な床である。床面検出時に発見できた柱穴は全部で6個所ある。この内、主柱穴になると思われるのはP2、P3、P4であることから、本址は4本柱と考えられるが、もう1本は調査区外にあると思われる。

カマドは北壁中央に構築されているが、下水道工事によって左袖は破壊されている。残っていた右袖の構築材の中に袖石が残っていた。火床面は若干赤色に変化している程度である。構築材はほとんど残っておらず袖石も多くが抜かれていた。北壁の残りが良いことを考えると、烟の耕作によって破壊されたとは考えにくく、住居址の廃絶後にカマドの解体があったと思われる。カマドの焚口付近には黒褐色土で貼床されており、よくしまった床である。貼床の厚さは約3cmである。カマド東側には土師器や須恵器の壘片、須恵器坏などが見られた(第26図)。

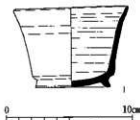


第26図 12号住居址 平面図 (1:50)

遺物 本址のカマドとその周辺、北壁付近から土師器片57点、須恵器片8点が出土したが、図上復元できたのはカマド東側から出土した高台付の須恵器坏2分の1個体1点のみである(第27図)。

この須恵器坏は蕎麦猪口のような形をしており、短く踏ん張った高台からはっきりした稜が付き、やや外側に開きながら立ちあがる。器壁は4mmと薄手であり、口縁部付近は内側から押されてやや外反する。内面の胴部には口クロで引き上げた時の痕跡がはっきりと見て取れるが、口縁部はそれほど明確で

はない。色調は外面が黒灰色を呈し、釉がかかった部分は茶褐色になる。このため外面の整形ははっきり見えない。内面は灰色である。胎土に白色粒子と細砂を含む。高台の外側は接合面がほとんど目立たないほど丁寧に接合してあるが、内側の接合面にははっきりと段が付く。8世紀始めころの遺物と考えられる。



第27図 12号住居址
出土遺物実
測図 (1:3)

(14) 13号住居址

遺構 本址はG-103・104グリッドに位置している。わずかに北壁隅とカマドが検出できただけであるため、住居址の規模については不明であり、掘り込みも6~8cmと浅い。カマドは東壁に構築されており、カマドの覆土中には焼土粒子が混じる。火床面の焼土の厚さは6cmあったが、全体が赤褐色に変色しただけで焼きしまった程度である。カマド内から土師器壺片が出土した(第28図)。

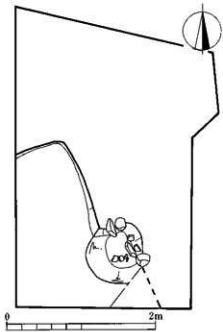
土師器片が45点と須恵器片が1点出土するが復原して図化できるようなものはない。

(15) 15号住居址

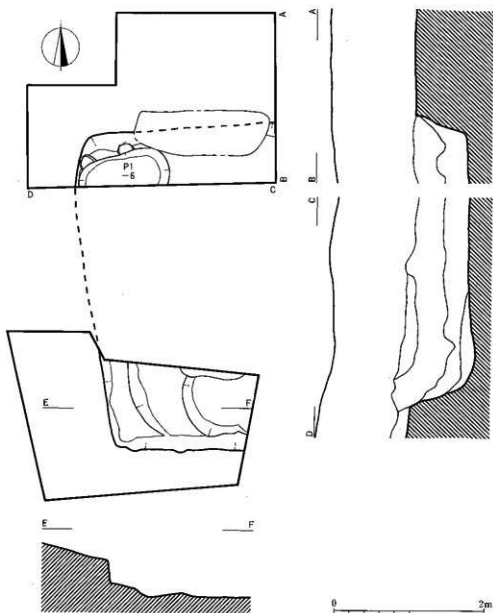
遺構 本址はA・B-99~101グリッドに位置する。水道管埋設により、また渠道側溝工事により攪乱され完掘できなかった。

平面形は隅丸方形と思われ、竪穴の大きさは南北4.2mであるが東側が調査区外へと延びているため東西の大きさ不明である。掘り込みの深さは北壁が約74cm、西壁で約52cm、南壁で約48cmと深い。北東壁下に東西120cm、深さ5.8cmの楕円形を呈すると思われるP1が検出された。南側には、西壁から東へ向かって5~9cmの段差をもって2段のテラス状をなす。一番低い場所から中心部に向かって堅い床が見られる。カマド痕跡のような居住性を示す構造物は検出されなかったが、完掘できないので詳細は明らかではない。竪穴状遺構ではないかと考えられる。

わずかながら土師器片を出土したが、器形復原を行えるものはない(第29図)。



第28図 13号住居址 平面図 (1:50)



第29図 15号住居址 平面図 (1:50)

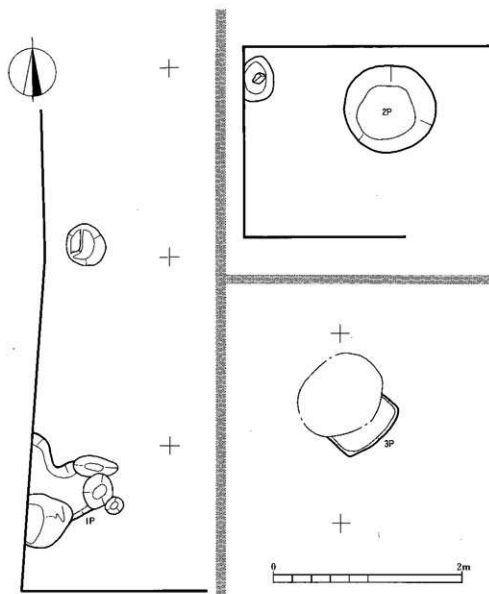
(16) 小 堅 穴

遺 構 小堅穴は3基検出している。1PはA-121グリッドに検出された。平面形はやや楕円形であり、深さは22cmを測る。土師器坏底部が出土している。

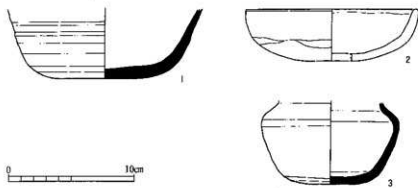
2PはA-146グリッドに検出された。直径90cm、深さ61cmを測る。遺物は出土していない。

3PはB-93グリッドに検出された。平面形は隅丸方形と思われるが、擾乱によって西側半分が壊されるためはっきりしない。土師器坏や高坏の破片、須恵器坏の破片が出土している(第30図)。

遺 物 1は1Pから出土した残存器高が5.5cmとやや大きな須恵器坏の底部である。おそらく口縁部までわずかであると思われるが同一個体の口縁部片とは接合しない。底部から緩やかに立ち上がり胴部中程から器壁が薄くなる。内外面ともロクロ調整によるナデであるが、底部はヘラケズリが施される。胎土に白色粒子と雲母片を含み、色調は褐色を呈する。7世紀の終りから8世紀にかけての遺物と



第30図 小竪穴 平面図 (1:40)



第31図 小竪穴出土遺物 (1:3)

思われる。

2は3Pから出土した非ロクロ成形による丸底の坏である。内外面とも丁寧なヘラミガキが施されており、口縁部から胴部にかけては横ヘラミガキである。色調は褐色であるが外面の口縁部付近では黒褐色、内面は暗褐色となる。

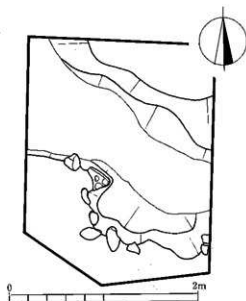
3も3Pから出土している須恵器短頸壺である。内外面ともにロクロ調整によるナデであり、底部はヘラケズリを施す。色調は外面の釉がかかる部分は黒色で、内面も頸部から胴部のくびれにかけて自然釉がかかる。他の部分は灰色であるが水田の床土のような黄土色の土がついており、細かな気泡のようにアバタ状の凹凸が見られる。どちらも11号住居址とほぼ同じ時期の遺物であると思われる(第31図)。

(17) 溝状遺構

遺構 本址はA-63グリッドから発見された溝状の遺構である。覆土中からは須恵器片・土師器片が出土したことから、自然の溝ではなく人為的に掘られたものであると思われる。

この溝は調査区の北西から南東に向かい、基底部に24cmのレベル差の傾きをもちなだらかに降り、溝の上端の幅は北西側で1.5m、南東側で1.1mと次第に細くなるため、終結部に近いと思われる。

以前に行われた今回の西側に近接する場所の調査でも今回発見された溝状遺構に続くと思われる遺構が発見されており、覆土中から鉄製紡錘車や多量の須恵器環などが出土している。どちらの調査でも覆土の土層観察では基底部に砂などの堆積物は見られないため、水が流れていたか断定できない(第32図)。



第32図 溝状遺構 平面図 (1:40)

おわりに

平成10年度から始まった県単道路改良事業に伴う榎垣外遺跡発掘調査も平成11年度をもちまして終了することができました。

榎垣外遺跡は古くから長地、中村、中屋、東堀地区に広がる市内最大の集落遺跡として知られ、これまでの調査により縄文・弥生・古墳・奈良・平安といった各時代の集落が発見されております。なかでも奈良・平安時代の遺構では長大な掘立柱建物跡が発見され、これら建物跡が規則性をもって配置されていることから官衙址であることが判り、諏訪郡衙址ではないかと推測されております。

この官衙址から南西側へ、横河川の自然堤防沿いまでの広い範囲にはこの時期の集落が広がり、これまでの発掘調査では住居址から緑釉陶器唾壺、皇朝十二銭「隆平永宝」、円面硯、八花鏡、方鏡、鉄製バックル、銅製腕、丸軋、刀子など、庶民の生活用品とは違った役人の生活を示すような遺物も見られています。

このようなことから榎垣外遺跡は奈良・平安時代には、官衙である掘立柱建物を中心に、周辺には役人の居住地や庶民の居住地があり大勢の人々が住み、諏訪地方で最も栄えていた街であることが推測されます。

今回このような榎垣外遺跡を南北約300mにわたり調査することにより、これまで発見例のなかった帯金具の1つである蛇尾をはじめ、円面硯や刀子・紡錘車・墨書土器などこれまでの調査資料をより充実させることができ、榎垣外遺跡の性格を一層明らかにすることができました。

発掘調査につきましては工事関係者、地元住民の方にご協力をいただきました。報告書刊行では土師器・須恵器の鑑定を、長野県教育委員会文化財・生涯学習課指導主事 原 明方氏に依頼し、ご指導・ご助言をいただきました。これら多くの皆様により感謝申し上げます。またこれまで発掘調査に携わってこられた作業員の皆様にも厚くお礼申し上げます。

住居址一覽表

* 住居址の大きさを示す測定値は、主軸とこれに直交する横軸の値。() 内は推定

住 No.	平面形 (推定)	主 軸	規 模 (m)	炉・カマド	時 期	備 考
1	隅丸方形	—	3.6×(3.1)	—	平 安	
2	(隅丸方形)	—	10.7×(3.0)	—	奈 良	
3	(隅丸方形)	—	—	—	—	
4	(隅丸方形)	—	(4.7×—)	—	—	
5	(隅丸方形)	—	(4.8×4.5)	—	奈 良	
6	隅丸方形	N-27°-E	3.8×3.8	カマド	平 安	
7	隅丸方形	—	—	—	平 安	
8	(隅丸方形)	—	(4.6×3.4)	—	—	
9	—	—	—	—	—	
10	隅丸方形	N-23°-W	3.8×(3.6)	—	平 安	
11	—	N-4°-E	9.3×(—)	カマド	奈 良	
12	隅丸方形	N-34°-E	4.5×4.5	カマド	奈 良	
13	(隅丸方形)	—	—	カマド	—	
14	隅丸方形	N-34°-E	—	—	平 安	
15	隅丸方形	—	4.2×(—)	—	—	窪穴状遺構

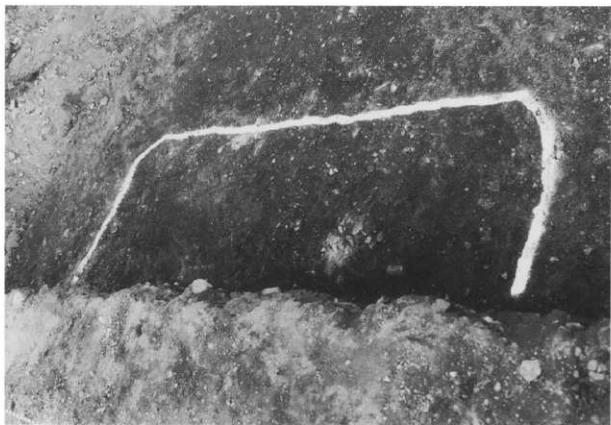
写 真 图 版



1号住居址



1・2・3号住居址



4 号住居址



5 号住居址



5号住居址 遺物出土状態



6・8・9号住居址



7号住居址



14号住居址



10号住居址



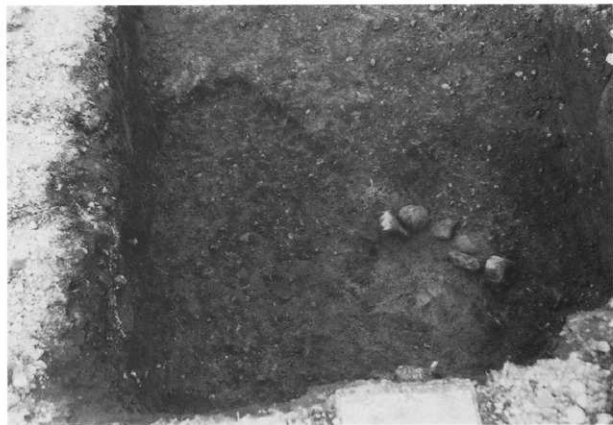
11号住居址



11号住居址 カマド



12号住居址



13号住居址



15号住居址



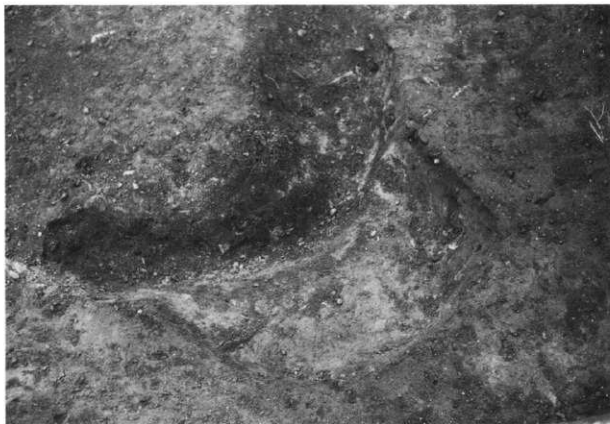
15号住居址



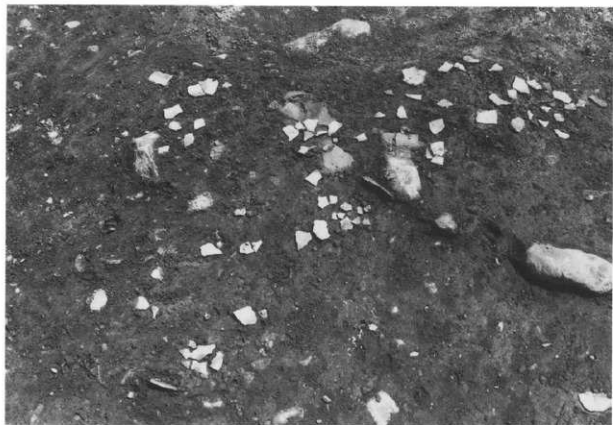
小竪穴1P 遺物出土状態



小壘穴 2 P



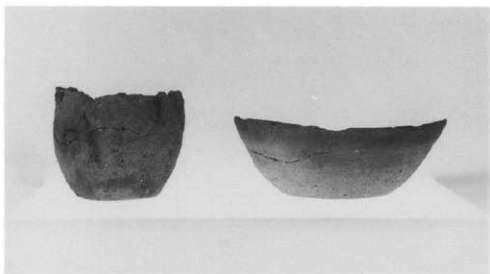
小壘穴 3 P



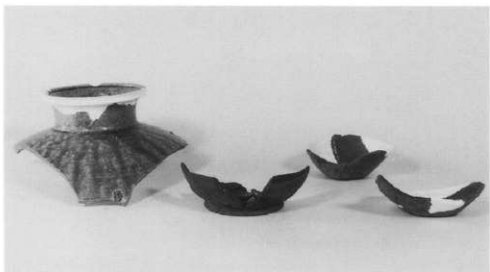
5号住居址 遺物出土状態



12号住居址 遺物出土状態



1号住居址 出土遺物



5号住居址 出土遺物



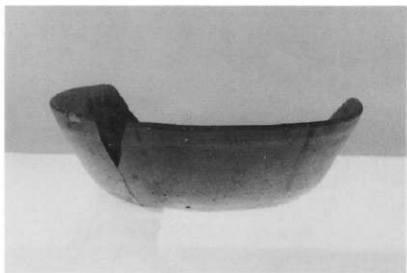
6号住居址 出土遺物



6号住居址出土 墨書土器



7号住居址 出土遺物



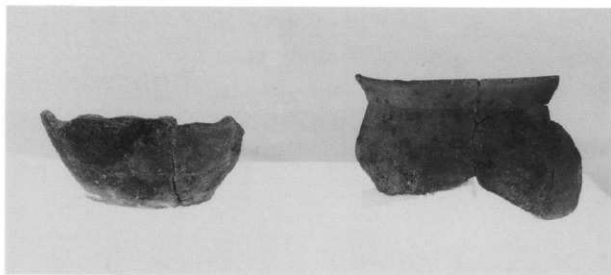
10号住居址出土 須惠器坏



11号住居址 出土遺物



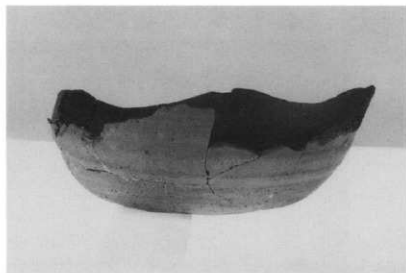
12号住居址出土 須恵器坏



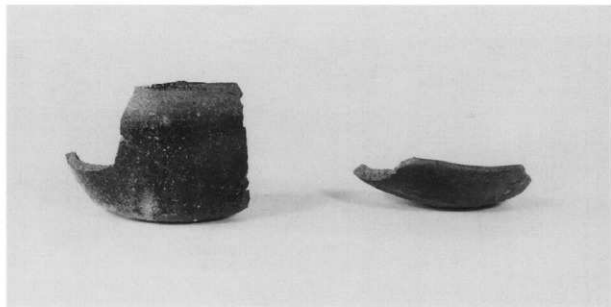
14号住居址出土 土師器甕



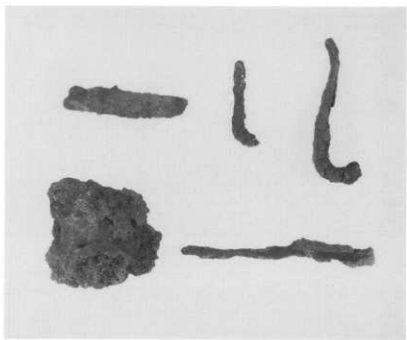
14号住居址出土 墨書土器



小竪穴1 P出土 須恵器坏



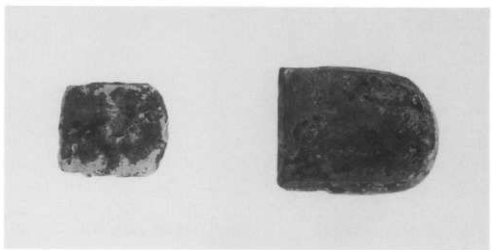
小竪穴3 P 出土遺物



板垣外遺跡出土 金属器



2号住居址出土 鉄製紡錘車



11号住居址出土 青銅製蛇尾



11号住居址出土 鉄製麻皮剥器



11号住居址出土 凹面碗



11号住居址出土 砥石

報告書抄録

ふりがな	えのきがいといせき							
書名	榎垣外遺跡							
副書名	一平成10・11年度県単道路改良事業に伴う榎垣外遺跡発掘調査報告書一							
巻次								
シリーズ名	郷土の文化財							
シリーズ番号	21							
編著者名	長野県岡谷市教育委員会							
編集機関	長野県岡谷市教育委員会							
所在地	〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1 TEL 0266 23-4811							
発行年月日	西暦2000年3月13日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 .."	東経 .."	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
榎垣外	長野県 岡谷市 長野地	20204	134	36° 4' 38"	138° 4' 7"	19980713 5 20000313	1,243.2	県道拡張工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
榎垣外	集落	奈良時代 平安時代	奈良・平安時代 住居址 15棟 小竪穴 3基	門面礎 蛇尾				

郷土の文化財 21
ENOKIGAITO SITE

榎垣外遺跡

発行日	平成12年 3月
編 集	岡谷市教育委員会 生涯学習課分室 〒394-0021 長野県岡谷市森田2-1-52 TEL 0266 (22) 1020
発 行	岡谷市教育委員会 〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1 TEL 0266 (23) 4811
印 刷 製 本	も え ぎ 企 画 書 籍 〒394-0043 長野県岡谷市御倉町2-21 TEL 0266 (22) 4892

